

タイ国力セサート大学滞在記

金 浜 耕 基
(山形大学農学部蔬菜研究室)

Everyday Life in Thailand
Koki KANAHAMA

1981年8月12日から1982年2月7日まで国際協力事業団の依頼でカセサート大学中央研究所に客員講師として滞在する機会があった。初の海外渡航であり、タイ国に関する知識、赴任してからの任務内容もよく知らないにもかかわらず訪問する気になったのは生来の物好きのせいだったのかもしれない。すなわち、東京での熱帯諸病用の予防注射やクスリの調達、成田空港への行き方、飛行機の乗り方など1つ1つ教えてもらいながらの一人旅であった。出発直前に、バンコク空港で迎えの人が待っていると行われて行ったものの、顔を見たこともない人にどうしたら会えるのかなと考えてもいなかった。それでも2時間ほどかかって会うことができたのは同じ日本人同士の直感からであったのだろうか。

ホテル到着後、2、3の注意事項、タイ事情の説明を受けた後、翌日の再会を約束して皆帰宅してしまった。彼らが言うには、タイでは賭事、ポルノなどの公序良俗を害するものは禁止されているので違法行為を犯さないように——などということであった。それではあの「エマニエル夫人」はウソだったのか、ガイドブックに書いてあったのは何だったのかなどと悔やんでも後の祭りであった。これからの6ヶ月が地獄のように思われた。

一人で夕食をとり、日本の垢を落して、無事到着した事を日本へ知らせてまず眠ることにした。この時はなぜ自分がツインルームに泊っているかなど疑問に思う余地など全くなかったのは言うまでもない。

外国で一人で泊るとどんなに緊張するのか、小さな物音でも目が醒めるようである。ドアの向うでボーイのつぶつぶ声かした“Do you like maseuse?”と聞くので、“Yes, I like, but today I need not it”と言ったら残念そうにして帰って行ったので、タイでは寝る前にマッサージをしてもらうのが習慣なのかと思った。

到着後数日間は地図を見ながら一人で街の中を見物したので、次に観光バスに乗って近郊の名所を見物することにした。フロントで手続きをしながら話をしたら彼女曰く、“Are you alone?” “Yes, I am alone, and I am single in this country.” “Shall I escort you?” “Thank

you, if you have a time.”ということで、安心して郊外の観光地見物をする事ができた。ついでに夕食も一緒にということになったので、タイダンスレストランへ案内してもらった。酒と御馳走と美女のダンスを見ながら、何らかの会話が合った後に彼女曰く。“Do you like masseuse?” “Sure. But, why you ask it? Do you know why every boy of your hotel ask me same quistion?” “Yes sir. Don't you know what is masseuse? Masseuse is a young lady who take care of gentleman anything what he want.” “Oh, I see. I misunderstood massage and masseuse.” “Shall I introduce you a good masseuse?” “No, thank you. But, can you take care of me?” “No, I can not.” それははち切れんばかりのスタイルで、生々しく残る会話(だけ)でありました。

一週間バンコクに滞在してタイ国事情をたくさん勉強した後、北西100kmに移転したカセサート大学中央研究所カンベンセンキャンパスへ向った。途中でも、キャンパスからも全く山が見えず、一面の大平原で、さらに西へ100km行くと初めて山が現われるような所であった。海岸から200kmほど離れた所であるが、海拔6~7mであるという。キャンパスはタテ、ヨコ3.8km四方であって、その中に中央研究所、農業機械化センター、農業普及センター(以上が日本の援助で建設された)を中心として、農学部、家畜衛生研究所、教職員宿舎、学生寮、幼稚園、小学校、郵便局、病院、レストランなどの諸施設が整っていた。研究室では専用車、運転手、秘書、研究のためには大学院生2人と作業員2人、宿舎にはメイド2人がついていて、仕事上も生活上も全く不自由のない環境であった。勤務時間は完全週休2日制であったが、何ら制約がなく、研究はすべて優秀な大学院生が指示した通り行ってくれたので、私は主として各地の園芸事情を視察することができた。

タイは北緯5~15度付近に位置するが、気象条件は地域によって大きく異なり、年平均気温、年降水量は南部が27.0℃、2755mm、中央部が28.0℃、1492mm、東北

部が27.0℃, 1539 mm, 北部が25.6℃, 1254 mm (酒田は, 11.8℃, 1957 mm) 程度であるから, 気温が高い割には降雨量が少ないことになる。すなわち熱帯サバナ気候であって, 周辺の熱帯モンスーン地帯とは非常に異った気象条件下にあると言えよう。さらに雨季と乾季(それぞれ約6ヶ月)に分かれるので, 乾季には天水にたよる農業は成立しにくいことを意味する。このような背景のもとに, 私の滞在中における研究はトウモロコシ, 三尺ササゲの効果的なかん水方法や施肥方法によって種子生産の飛躍的増大をはかることであった。その結果は Ann. Rep. Veg. Seed Prod. C. L. G. C. Kaset. Univ. (1980~1981 & 1981~1982) に発表済なので, 関心のある方にお読みいただければ幸いである。

タイ国とは山田長政以前から交流があって, 東南アジアのなかでも特に友好関係が継続している国であると聞いていたが全くその通りで, 国民性も非常に寛容であり, 自ら微笑みの国と称するにふさわしい国であった。人種的, 文化的, 宗教的に近いせいも, 日常生活においても, 各種行事においても違和感がなく, 一緒になって楽しむことができたのは何よりの幸せであった。タイ人は日常生活においても, 公の場においても社交性があり, 遊び上手であって, 何かの機会で人が集まれば皆で歌ったり, 踊ったりするので, 無芸大食の私にとってはいささかあきれるばかりであった。研究発表会でも, 卒業式でも, 大学の創立記念日でも皆同じである。そのつど呼ばれて行っても初めのうちは物めずらしきで楽しかったが, しだいに飽きがきてあまり行かなくなった頃, 今夜は盛大な創立記念パーティーがあるというので行ってみたら, 例のごとく, 歌って, 踊って, 食べて, 飲んでの大さわぎであった。すると突然, 屋外ステージの方で大歓声が上がったので何げなく見てみると, ファッションショーの始まりであった。一回, 二回と着替えて出てくる度に1枚ずつ少なくなっているではないか。夜おそ

く, 最後まで見ていたのはもちろんのことである。歴代の学長以下, 主だった先生方と一緒に見ていたのだから何で私だけがうしろめたいことがありましようか。

よく知っているようで知らないのが外国である。タイについても例外ではない。例えば次の文章は何の意味でしょうか。

Krungthep Mahanakhon Amon Ratanagosin Mahintra Mahadilok Noparat Rajakanya Burirom Udomnives Maha Satan Amorn Piman Owantarn Satit.

意味は下記の通りである。

神仙の都 偉大なる都 帝釈天の永遠の宝石のある
帝釈天の難攻不落の町 至大至高の土地 壮麗な王宮のある偉大なる場所 神仙の御殿 ナライ天が降臨し お住みになっている 帝釈天がビシュヌカマルをして建設させ 国王陛下に捧げ給いし都 (富田竹二郎訳)

この名前全部が首都バンコクの正式名である。バンコクと呼ぶのは外国人だけで, 一般の人々には通用しない。通常はクルンテープ, ラタナコシンなどと呼んでいる。外国に住むために必要な言葉は, 最低でも正確な地名と数と「いくらですか」であると思った。特に商品などに定価のない地域ではそれだけでも買い物ができるようである。

タイでの生活が良かったか, 悪かったかの評価は個人々々によって極端に分かれるようである。富と貧困, 清浄と不潔, 寛容と陰険, 戦争と平和, 天国と地獄が渾然一体となっているので, 見る立場, 見る目によって違って見えるのは当たり前である。その昔, 浦島太郎が亀に乗って行ったのはタイではなかったのだろうかと思う今日この頃である。龍宮城でうつつを抜かしていると無意識のうちに玉手箱を開けるようになってしまうのである。